

幼児の気質が母親の行動特徴と養育態度に及ぼす影響

Influences of Child Temperament on Maternal Attitude and Behavior

森下 順子

MORISHITA Junko

(和歌山信愛女子短期大学)

森下 正康

MORISHITA Masayasu

(和歌山大学教育学部)

2005年10月4日受理

母と子の相互作用の中で子育てが進行し、母親が子どもに影響するように、母親自身も子どもから影響されると考えられる。本研究の目的は、子ども自身が持って生まれた気質が、母親の行動や養育態度にどのような影響を及ぼすかを検討することであった。3才児をもつ母親475名を対象に、子どもの気質・母親の行動特徴・養育態度について調査を行い428名のデータを得た。

主要な結果は次の通りであった。(1)パニックになりやすい男児の特徴が、母親の激しい感情表出をひきおこすことが明らかとなった。男児は、パニックになった場合、一般的に動きも激しいため、母親も激しく反応してしまうと考えられる。(2)情緒が安定している男児の特徴が、母親の受容的な関わりをひきおこすことが明らかとなった。育てにくい子どもの場合は、受容的な関わりができずに悩んでいる母親が多かった。(3)パニックになりやすい、あるいは外界に対しての反応が無頓着な女児の特徴が、母親の統制的な関わりをひきおこすことが明らかとなった。一般的に男児と違い女児は、パニックになったとしても、統制的な関わりで対応でき、また、無頓着で反応が鈍い子どもには、母親は、より統制的な関わりになると考えられる。(4)情緒の安定している女児の特徴が、母親の統制的でない関わりをひきおこすことが明らかとなった。穏やかな育てやすい女児から、母親も影響を受け、お互いに受け入れられるよい関係になると考えられる。以上の結果から、母親の養育態度だけを問題視するのではなく、子どもからの影響も考えられるため、まわりの人たちは母親を受容的にサポートする必要がある。

キーワード：気質・母親の行動特徴・母親の養育態度・幼児期

問題

子どもを育てるという事は、体力的・精神的に大変なエネルギーのいる事である。また、子どもの成長を楽しみ、一緒に笑い泣き、母子にとって、人と人との本気・本音でぶつかりあうという経験が人生を通してできるのも子育てである。

たいていの母親は、子どもを取り巻く環境や、母親の養育態度が子どもに影響するということを意識しながら子育てをしている。しかし、自分の子どもとして、または、一人の人間として関わっている中で、なぜか自分の感情や行動が押しえられず、子育てがしっくりいかないときもある。子どもが複数いる場合、自分の子どもに対し、同じように関わろうと思っても同じように関われなかったり、子どもによって、叱り方・誉め方が変わってくるという経験もあるであろう。「子どもには同じような態度で」という事は、わかっているも同じようには関わりにくい。「なぜ、おなじお腹から生まれてきたのに、こんなに違うのだろう。」と、子どもを見て思うのと同じように、母親自身が、子どもに

よって関わり方が違う事に、不思議に思ったり、悩んだり、葛藤することもある。

また、日常の母親の会話の中で、「この子は育てやすい」とか「育てにくい」などといわれているのをよく耳にする。このようなことから、子どもを取り巻く環境や、母親の養育態度が子どもの発達に影響するように、子どもの側から、母親に影響を与えているのではないだろうか。

そこで、本研究では、生得的であるとされている子どもの気質に焦点をあて、子どもの気質が母親の行動特徴や養育態度にどのように影響を及ぼしているのかを検討する。まずひとつめは、母親自身の行動特徴に、子どもの気質がどのような影響を及ぼしているかについて検討する。ふたつめは、母親の養育態度に、子どもの気質がどのような影響を及ぼしているかについて検討する。

気質研究を行なったトマス・チェス・バーチ(Tomas, Chess, Birch)の9年間にわたる「ニューヨーク縦断研究」では、ほとんどの子どもたちの元来持っている気質的特徴は何年も変わらずに残っている

と結論づけた。彼らは環境要因だけでは子どもの行動障害の発生を説明しきれないとし、個人差要因の可能性を示唆した(ステラ チェス・アレクサンダー トマス, 1981)。

トマスらは、「ニューヨーク縦断研究」において、9つの気質カテゴリーを見出した。このカテゴリーとは、活動水準・周期性・接近回避・順応性・反応性の閾値・反応の強さ・機嫌・気の散りやすさ・注意の範囲と持続性である(菅原ら, 1988)。さらにカテゴリー分類に基づいて、「扱いやすい子」「扱いにくい子」「慣れに時間のかかる子」の3種類の気質のタイプに分類している(庄司・前川, 1981)。

気質傾向及び発達スタイルは、子どもが発達するにつれ環境要因の影響も受ける。しかし、環境の影響は、その子の気質によって効果が異なる。それと同時に気質自体がその環境となる他者の行動に影響を与えることがいわれるようになった(村上, 1989)。

子どもを取り巻く環境や、母親の養育態度が子どもに影響を与えるばかりでなく、母親も子どもから影響されているという相互作用の関係があることが明らかにされることによって、母親自身の子育てに対する心の葛藤やストレスが和らぐと考えられる。

つまり、子育てに悩んでいる母親にとって、母親自身の問題とされるだけではなく、子どもの気質にも母親が影響されると認識することにより、子育ては母子間の相互作用であるのだから、人と人との関わりである以上、みんな違っていいという、当たり前のことにホッと、また子育てが調和のとれた楽しい事の一因になればと考える。

本研究の仮説は、以下の通りである。

- ① 育てやすい気質の子どもをもつ母親自身の行動特徴は、「子育てが楽しい」や「社会への関心を持つ様になった」など、ポジティブな方向へ変化する。また、養育態度も、受容的となり、母子間により相互作用が成立する。
- ② 育てにくい気質の子どもをもつ母親自身の行動特徴は、「子育ての疲れ」や「消極的になった」など、ネガティブな方向へ変化する。また、養育態度も、受容的ではなく、統制的な関わりとなり、母子間に悪い相互作用が成立する。

方法

(1) 調査対象

和歌山県下の6つの幼稚園と2つの保育園に通園する年少児、その母親、担任の先生が調査対象になった。園児数は計475名であった。担任の先生は、計27名であった。記名式とし、各幼稚園・保育園の協力により、428名(男218名、女210名)、回収率90.1%のデータが回収された。

その中で、記入漏れなどのないデータを分析の対象とした。分析データ数は結果にそれぞれ示した。

(2) 手続き

各幼稚園・保育園を訪問し、園長先生に本研究に関する趣旨をご理解頂いた上で、園児を通して家庭に質問紙を配布した。子どもの気質、母親自身が子育てを通して変化したと思われる行動特徴、養育態度について、母親に評定を求めた。また、担任の先生には、子どもの気質について、ひとりひとりの評定を求めた。配布する際、園長先生からの協力依頼を添付していた。配布の後、2週間後に回収した。回収にあたっては、あらかじめ調査用紙と共に配布した封筒に入れていただき、担任の先生に提出していただいた。そして、園ごとに回収させてもらう形をとった。

調査期間： 2003年6月から7月まで

(3) 用いた質問紙

a. 子育てを通しての母親自身の行動特徴の変化に関して：まず、母親が子育てを通してどのような行動特徴が変化したと感じているか、既婚歴のある女性15名に半構造化面接を行った。そのように得られたデータをもとに質問紙を作成した(表1)。

b. 子どもの気質に関して：菅原ら(1994)が、日本語版TTS(Toddler Temperament Scale)より得た7因子(61項目；見知らぬ人・場所への恐れ、フラストレーション・トレランス、周期の規則性、視聴覚的敏感さ、反応の激しさ、注意の持続性と固執性、味覚・触覚的敏感さ)より、母親・担任の先生両方から評定しやすい項目、各6項目ずつ計42項目を選んだ。質問紙の教示は、母親に対しては、「あなたのお子さんが、おおよそどのようなしかたで行動するかを調べるためのものです。次の文を読んでお子さんの状態に最も近いと思われる数字を例のように○で囲んでください。」とした。また、担任の先生に対しては、「幼児が、おおよそどのようなしかたで行動するかを調べるためのものです。次の文を読んで対象の幼児の状態に最も近いと思われる数字を例のように○で囲んでください。」とした。評定はいずれも6件法で、ぜんぜんちがう(0)、かなり違う(1)、ややちがう(2)、ややそうだ(3)、かなりそうだ(4)、非常にそうだ(5)であった。

c. 養育態度に関して：鈴木らの作成した養育態度尺度の30項目の中から25項目を用いた(堀, 1994)。内訳は、受容的・子ども中心のかかわり尺度10項目、統制的かかわり尺度10項目、責任回避的かかわり尺度5項目、計25項目であった。質問紙の教示は、「対象になっている子どもさんに対するあなたの態度についてお尋ねします。以下の項目について、あてはまる数字の番

表1 母親の行動特徴の変化に関する因子パターン

	因子1 激しい感情表出	因子2 子育ての疲れ	因子3 社会への関心	共通性 因子抽出後
1 怒りっぽくなった。	.801	-.004	-.093	.658
2 感情的になった。	.792	-.067	.035	.577
3 気が短くなった。	.792	-.035	-.095	.618
4 イライラするようになった。	.663	.179	.012	.632
5 ストレートに感情が出せるようになった。	.570	-.160	.117	.356
6 大声を出すようになった。	.531	.135	.039	.369
7 我がでた。	.513	.067	.021	.375
8 気が長くなった。	-.486	.092	.377	.357
9 しっかり叱るようになった。	.473	-.107	.313	.334
10 自分の子には厳しいと感じるようになった。	.373	-.035	.152	.145
11 自己中心・わがままになった。	.305	.189	-.218	.463
12 気遣いで疲れるようになった。	.044	.755	.182	.555
13 気が小さくなった。	-.108	.625	.022	.438
14 悩みすぎるようになった。	.105	.613	.165	.465
15 なんでも否定的に考えるようになった。	.007	.466	-.117	.320
16 友人が増えた。	.207	-.395	.228	.219
17 何事も制限されるようになった。	.213	.314	.116	.285
18 自分の時間がなくなった。	.027	.239	.010	.107
19 人の気持ちになって考えられるようになった。	.028	-.086	.493	.267
20 責任感が強くなった。	-.015	.041	.479	.222
21 いろいろなことに興味がもてるようになった。	.125	-.243	.452	.332
22 いろいろなことに敏感になった。	.040	.213	.435	.193
23 毎日が楽しくなった。	-.036	-.397	.415	.506
24 社会に興味を持てるようになった。	.017	-.078	.392	.181
25 なんでも早くするようになった。	.031	.171	.384	.153
26 涙もろくなった。	.078	.239	.364	.170
27 子ども中心になった。	.051	.229	.352	.172
28 我慢強くなった。	-.226	-.012	.333	.181
29 子どもが嫌いになった。	.169	.194	-.305	.227
30 明るくなった。	.068	-.218	.272	.151
31 子どもに思いやりをもてるようになった。	.043	-.119	.190	.057
32 金銭的に大変になった。	.188	.140	.189	.105
	4.747	3.604	2.642	10.993
寄与 (%)	(14.7)	(11.3)	(8.1)	(34.1)

号に○をつけてください。」とした。評定は、まったくそうでない(0)、あまりそうでない(1)、どちらともいえない(2)、まあそうだ(3)、たしかにそうだ(4)の5件法を用いた。

結果

(1) 各尺度の因子分析

a. 母親自身の行動特徴の変化に関して：417名のデータの因子分析を行った。まず主成分分析を行い固有値の変動に注目して因子数を決定し、次に主因子分析を行い、最終的にプロマックス回転を行った(表1)。第1因子「激しい感情表出」(α 係数.834)・第2因子

「子育ての疲れ」(α 係数.694)・第3因子「社会への関心」(α 係数.661)の3因子が得られた。

b. 子どもの気質に関して：TTS尺度42項目を用いたが、先生による評定の欠損値が多かった項目8項目を、母親の評定・先生の評定どちらもから省き34項目で分析した。

母親が評定した子どもの気質(TTS)について、因子分析を行った。データ数は、404名であった。比較的安定した4因子が得られた(表2)。

第1因子は、「見知らぬひと・場所への恐れ」、第2因子は、「フラストレーション・トレランス」「周期の規則性」「注意の持続性・固執性」がまとまり、第3因

子は、「反応の激しさ」、第4因子は、「視聴覚的敏感さ」「味覚・触覚的敏感さ」がまとまりであった。

因子負荷量の高い項目を用いて尺度を構成し、尺度の信頼性を示す α 係数を算出した(表2)。

次に、先生が評定した子どもの気質(TTS)について、因子分析を行った。データ数は208名であった。母親の評定と同じく因子数を4個として主因子分析を行った。パターン行列によると4個の因子は、比較的安定した結果が得られた。

4因子の母親が評定した因子と内容が一致した。 α 係数を算出したところ、第1因子は.936、第2因子は.864、第3因子は.889、第4因子は.869であった。

これらの結果から、母親からみた子どもの気質と、先生(第三者)からみた子どもの気質の評定は、おおよそ共通性がみられ、信頼性があるものと考えられる。本研究で得られた、第1因子を「人・場所への適応性」因子、第2因子を「情緒の安定性」因子、第3因子を「パニック傾向」因子、第4因子を「外界への無頓着

さ」因子と命名した。

c. 養育態度に関して:25項目について、因子分析を行った。データ数は、412名であった。養育態度尺度の因子数が3個であることに注目して、主因子分析を行った。プロマックス(斜交)回転による3個の因子は、比較的単純構造を示し安定していた。因子負荷量の比較的高かった項目を使用し尺度を作成した(表3)。 α 係数の結果は、第1因子.774、第2因子.744、第3因子.714であった。

養育態度について、先行研究を参考にしながら、第1因子を「統制的関わり」因子、第2因子を「受容的関わり」因子、第3因子を「一貫性のなさ」因子と命名した。

表2 子どもの気質尺度の項目

人・場所への適応性 (α 係数:0.886)

- 1 知らない大人にも、すぐに話しかける。
- 2 新しい環境にも10分以内になれる。
- 3 知らない大人に遊んでもらうときも、にこにこしている。
- 4 なれない場所にはじめていったときも機嫌がよい。
- 5 初めての人には15分たってもまだ警戒している。

情緒の安定性 (α 係数:0.774)

- 1 顔を拭いている間、機嫌よくしている。
- 2 服を着させるときじっとしている。
- 3 食事のときに食べる量は毎日ほとんど同じである。
- 4 してはいけない事をしようとしたとき、言い聞かせればやめる。
- 5 お腹がすいていても、食事が準備されるのを機嫌よく待つ。
- 6 食事時間は空腹になっている。
- 7 嫌がらずに服の脱ぎ着をさせる。
- 8 欲しいものややりたいことが数分間またされても我慢して待てる。
- 9 一日の中で、最も活動的になる時間帯は一定している。
- 10 新しく覚えた技能を10分間以上やり続ける。

パニック傾向 (α 係数:0.807)

- 1 遊びがうまくいかないと、泣いたり金切り声をあげたりする。
- 2 何か失敗した時は強い反応を示す(泣く・じだんだを踏む)。
- 3 自分の思い通りにならないと激しく反応する(泣く・じだんだ踏む)。
- 4 取り乱したり泣いたりする時、足をばたばたさせたり腕を振り回したりする。

外界への無頓着さ (α 係数:0.629)

- 1 普段食べている食べ物の味や固さの違いに無頓着である。
- 2 牛乳のタイプやジュースの種類が違っていても、味の違いには気づかないようだ。
- 3 快・不快を問わず、においは無頓着である。
- 4 外から突然大きな音が聞こえても、おもちゃでの遊びを続ける。
- 5 汚れていても、いっこうに気にしない。
- 6 暑い日でも寒い日でも、気温の違いに気づかない。
- 7 部屋の中で物音がしてもしていることを続ける。
- 8 他の子どもたちの遊んでいる声が聞こえると、していることをやめてそちらをみる。

表3 親の養育態度尺度の項目

統制的関わり (α 係数: 0.774)	
1	子どもがいつけどおりにするまで、子どもを責めたてる。
2	子どもにはできるだけ私の考えどおりにさせたい。
3	子どもを、自分の言いつけどおりにしたかわせている。
4	子どもに対しては決まりをたくさん作り、それをやかましく言わなければならないと思う。
5	子どもがすべきことをちゃんとしてしまうまで何回でも指示する。
6	子どもに何事もどんなふうにしたらよいかを、こと細かに言い聞かせる。
7	子どもの行儀をよくするために罰を与えるのは、正しいことだと思う。
8	子どものした悪いことは、みな、何かのかたちで罰をあたえるべきだと思う。
受容的関わり (α 係数: 0.744)	
1	子どものことに、じゅうぶん気を使っている。
2	自分のことは我慢しても、子どものためにしてやることがよくある。
3	子どもにたびたび話しかける。
4	子どもが怖がっている時には安心させてやる。
5	うちで子どもと楽しい時間を過ごす。
6	自分にとって、子どもが何より大切だ。
7	子どもの悩みや心配事を理解している。
8	子どもと一緒に、外出や旅行をするのが好きだ。
9	私の全生活は、子どもを中心に動いている。
一貫性のなさ (α 係数: 0.714)	
1	子どもが同じことをしても、時によっては叱ったりほうってしまったりする。
2	そのときの気分しだいで、子どもに決まりを押しとおしたり、ゆるめたりする。
3	やっちはいけないとわたしがいったことを子どもがしていても、黙ってみていることがある。
4	子どものために作った決まりを、よく変える。
5	きまりを守るように、子どもに強く言う日もあれば、忘れている日もある。

(2) 子どもの気質からの影響・重回帰分析

子どもの気質からの影響を調べるために、ステップワイズ法による重回帰分析をおこなった。母親の評定による行動特徴（「激しい感情表出」「子育ての疲れ」「社会への関心」と養育態度（「統制的関わり」「受容的関わり」「一貫性のなさ」）をそれぞれ従属変数とし、子どもの気質4特性を独立変数とした。

男児について結果をまとめたのが図1である。母親の行動特徴「激しい感情表出」に対して、子どもの「パニック傾向」がプラスの影響を与えていた ($P < .01$)。母親の行動特徴「子育ての疲れ」に対して、子どもの「パニック傾向」はプラス、子どもの「情緒の安定性」がマイナスの影響を与えていた ($P < .05$)。母親の行動特徴「社会への関心」に対して、子どもの「情緒の安定性」がプラスの影響を与えていた ($P < .01$)。養育態度「受容的関わり」に対して、子どもの「情緒の安定性」がプラスの影響を与えていた ($P < .01$)。養育態度「一貫性のなさ」に対して、子どもの「外界への無頓着さ」はプラス、子どもの「情緒の安定性」はマイナスの影響を与えていた ($P < .05$)。

女兒について結果をまとめたのが図2である。母親の行動特徴「激しい感情表出」に対して、子どもの「パニック傾向」がプラスの影響を与えていた ($P < .01$)。

母親の行動特徴「社会への関心」に対して、子どもの「外界への無頓着さ」がマイナスの影響を与えていた ($P < .05$)。養育態度「統制的関わり」に対して、子どもの「情緒の安定性」 ($P < .01$)、子どもの「パニック傾向」「外界への無頓着さ」 ($P < .05$) がプラスの影響を与えていた。養育態度「受容的関わり」に対して、子どもの「パニック傾向」「外界への無頓着さ」がマイナスの影響を与えていた ($P < .01$)。養育態度「一貫性のなさ」に対して、子どもの「外界への無頓着さ」 ($P < .01$) はプラス、子どもの「情緒の安定性」 ($P < .05$) はマイナスの影響を与えていた。

(3) 母親の行動特徴の変化及び養育態度からの子どもの気質への影響

次に、母親から子どもがどのような影響を受けているかについて分析した。従属変数を母親から見た子どもの気質とし、独立変数を母親の行動特徴と養育態度として、ステップワイズ法による重回帰分析をおこなった。

男児について結果をまとめたのが図3である。子どもの「情緒の安定性」に対して、母親の行動特徴「社会への関心」はプラス ($P < .01$)、養育態度「一貫性のなさ」がマイナス ($P < .05$) の影響を与えていた。子

どもの「パニック傾向」に対して、母親の行動特徴「子育ての疲れ」はプラス ($P < .01$)、「社会への関心」がマイナス ($P < .05$)の影響を与えていた。子どもの「外界への無頓着さ」に対して、養育態度「一貫性のなさ」がプラスの影響を与えていた ($P < .01$)。

女兒について結果をまとめたのが図4である。子どもの「情緒の安定性」に対して、養育態度「一貫性の

なさ」がマイナスの影響を与えていた ($P < .01$)。子どもの「パニック傾向」に対して、養育態度「受容的関わり」はマイナス、母親の行動特徴「激しい感情表出」がプラスの影響を与えていた ($P < .01$)。子どもの「外界への無頓着さ」に対して、養育態度「一貫性のなさ」はプラス ($P < .01$)、「受動的関わり」がマイナス ($P < .05$)の影響を与えていた。

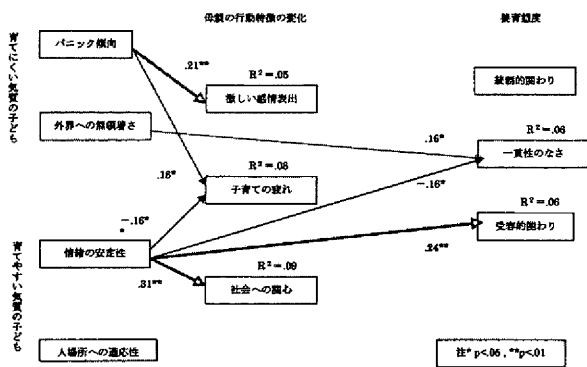


図1 子どもからの影響・男児

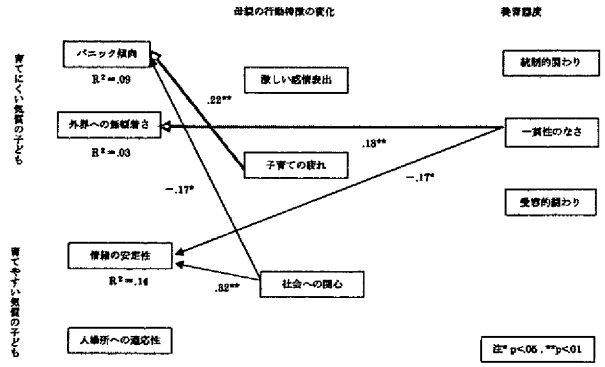


図3 母親からの影響・男児

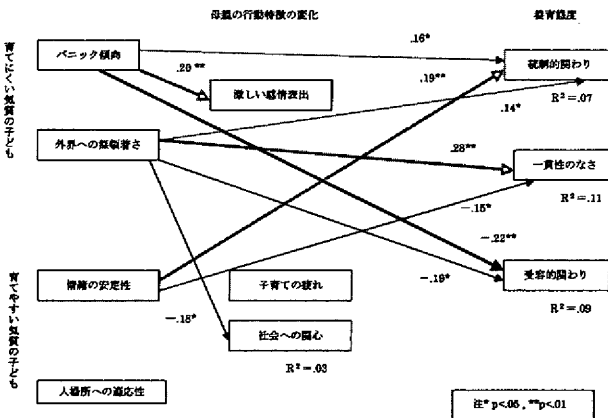


図2 子どもからの影響・女児

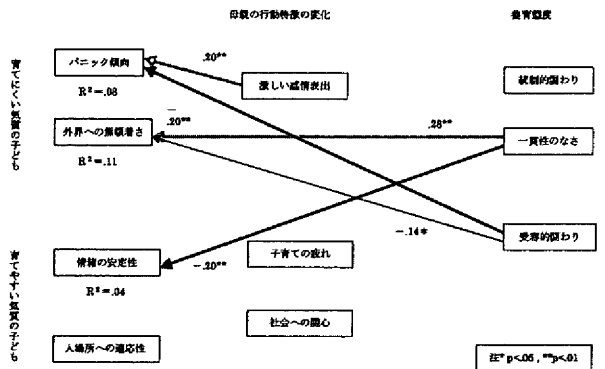


図4 母親からの影響・女児

考察

男児に関して

子どもの「パニック傾向」と母親の「子育ての疲れ」は、互いに影響しあっていることが示唆された。子どもがパニックになりやすいから、子育てを通して積極的な対人関係がもちにくくなってしまふ。反対に、積極的に外へ向いていけない母親だから、子どもにストレスがたまって爆発しパニックになってしまう。お互いに悪循環の道を貫いていることが考えられる。ここで、周りのサポートとして、母親が他人と関係がもてる育児サークルのような場に参加する機会があれば、どちらにも、改善が見られるのではないかと考える。

子どもの「パニック傾向」は母親の「激しい感情表出」に一方通行で影響していた。つまり、子どもの育てにくさの要因であるパニックになる子どもの特徴が、母親の激しい感情表出を引き出すと考えられる。母親自身、子育てを通して自分は「こんなにきつい人だったのか。」と感じる時が、まさにそうである。もし、パニックにならない子どもを育てているなら、そんなに母親が変化を強く感じなかったということがいえる。パニックになる子どもに対してどのように関わればよいかかわらず、激しい感情でしか子どもに接することしかできない、母親の葛藤も考えられる。

子どもの「外界への無頓着さ」と母親の「一貫性のなさ」もお互いに影響していることが示唆された。子どもが無頓着で反応が鈍いため、母親はその時々で母親の気分で関わる。反対に、母親がその時々で関わり方が違うから、子どもは神経質にはやっておれず反応が鈍く無頓着になるということが考えられる。

子どもの「情緒の安定性」と母親の「社会への関心」もお互いに影響していることが示唆された。情緒が安定し育てやすい子どもであるから、母親も外に自信を持ってでることができ、子どもに振り回されなくて楽しむことができる。また、母親が社会へ関心をもち楽しんで学んだり、肯定的な他人との関わりで安定しているので、子どもも情緒が安定すると考えられ、お互いにより循環で関わられていることが考えられる。

子どもの「情緒の安定性」は母親の「受容的関わり」に一方通行で影響していた。受容的関わりが子どもの情緒に影響するというよりは、子どもの情緒が安定しているから、母親が子どもに対し、受容的関わりができると考える。つまり、子ども側の気質が母親側に影響していることになる。

女兒に関して

子どもの「パニック傾向」と母親の「激しい感情表出」はお互いに影響しあっていた。男児と違い、パニックになりやすいから母親が激しい感情表出になるばかりではなく、反対に、母親は口やかましく激しく感情

をぶつけるから女兒は、パニックとなって反応すると考えられる。これは、男女の性別の差であるとも考えられる。

子どもの「パニック傾向」と母親の「受容的関わり」もお互いに負の影響を及ぼしていることが示された。パニック傾向が強いから、受容的関わりができない、受容的関わりができないから、子どもはパニックになるという相互作用が推測される。母親に対するサポートがあれば、子どもの行動が改善される可能性があるということになる。

子どもの「パニック傾向」は母親の「統制的関わり」に一方通行で影響していた。つまり、パニックになりやすいから、母親は統制的な手段で子どもを押し付けてしまうと考えられる。これは、子どもの育てにくい気質が、母親の養育態度「統制的関わり」に影響を及ぼしている要因のひとつであると考えられる。

子どもの「外界への無頓着さ」と母親の「一貫性のなさ」はお互いに影響しあっていた。子どもが無頓着で反応が鈍いため、母親はその時々で母親の気分で関わる。反対に、母親がその時々で関わり方が違うから、子どもは神経質にはやっておれず反応が鈍く無頓着になるとも考えられる。

子どもの「外界への無頓着さ」が母親の「社会への関心」に一方通行で負の影響を及ぼしていた。つまり、無頓着な子どもの特徴が母親の社会の関心を低下させているようだ。

子どもの「外界への無頓着さ」と母親の「受容的関わり」もお互いに負の影響を及ぼしていた。つまり、無頓着さは、受容的関わりを低下させているようだ。

子どもの「情緒の安定性」と母親の「一貫性のなさ」は、お互いに負の影響を及ぼしていた。情緒が安定していると、母親は一貫性のある関わりができる。母親に一貫性がないと子どもは情緒が安定しないということになる。これもどちらかの改善がみられたら、よい方向へかわると考えられる。

子どもの「情緒の安定性」が母親の「統制的関わり」に一方通行で影響を及ぼしていた。情緒の安定している女兒の影響を受け、母親は統制的な関わりを引き起こしていると考えられる。

以上、子どもの気質が母親の行動特徴の変化と養育態度に及ぼす影響について重回帰分析で得られた結果より、子どもの気質からだけ母親が影響を受けているパターンを整理する。

男児：「パニック傾向」が 母親の「激しい感情表出」に影響を及ぼす。

「情緒の安定性」が 母親の「受容的関わり」に影響を及ぼす。

女兒：「パニック傾向」が 母親の「統制的関わり」に影響を及ぼす。

「外界への無頓着さ」が 母親の「統制的関わり」に影響を及ぼす。

「外界への無頓着さ」が 母親の「社会への関心」に負の影響を及ぼす。

「情緒の安定性」が 母親の「統制的関わり」に影響を及ぼす。

まとめ

子供の気質が母親の行動特徴の変化と養育態度に及ぼす影響について、男児が母親に及ぼす影響と、女児が母親に及ぼす影響は異なっていた。男児を育てる場合と、女児を育てる場合とでは、母親が感じる行動特徴・養育態度は、異なると考えられる。

また、男児より女児のほうが、母親側に影響を多く及ぼしていることがわかった。つまり母親にとって同性であることが、育てにくい気質の子どもである場合、特に影響されていることになる。母親は、異性である男児との接し方がわかりづらいため、距離をおいて接し、女児より冷静な関わりになると考えられる。また、男児は一般的に、女児より体が弱く、障害児の出生率も女児より高いといわれる。男児の育て方が、女児より難しいので母親は、冷静になり、子どもからの影響は女児より少なくなると考えられる。

お互い影響しあっているか、子供の気質のみが母親

に影響しているかどちらかで、母親からだけの影響はなかった。つまり、子育てにおいては、母親から子どもが影響を受けるより、子どもから母親が影響を受けることのほうが強いといえる結果となった。今後本研究をもとに子どもへの支援に加え、子育て中の母親に視点を置いた支援を検討していきたいと考えている。

(追記 調査にご協力いただきました幼稚園・保育園の園長先生をはじめ担任の先生方や保護者の方々に深く感謝いたします。)

引用文献

- 庄司 順一・前川 喜平 1981 乳児の気質—その意義と評価法— 小児科診療44 (8), 9-13.
- 菅原ますみ・青木まり・北村俊則・島 悟 1988 乳児期における気質的特徴の構造 湘北紀要9, 157-163.
- 菅原ますみ・島 悟・戸田まり・佐藤達哉・木村俊則 1994 乳幼児期にみられる行動特徴—日本語版RITQおよびTTSの検討— 教育心理学研究 (3), 42, 315-323.
- ステラ チェス・アレクサンダー トマス (林 雅次訳) 1981 子どもの気質と心理的発達 聖和書店.
- 堀洋道・山本真理子・松井豊 1994 心理尺度ファイル 垣内出版株式会社.
- 村上佳世子 1989 子どもの気質と母子関係 小児看護12, 465-469.